

ぷれみあむ  
premium  
みにっつ  
minute

第4集

山里公園での休息  
の巻

☆ shiroa ☆

ここから山里公園までは二十分といったところか。こういうかたちでミュウちゃんを助手席に乗せることになるとは、露ほども思わなかった。

女の子を乗せて、公園までドライブ。

普通だったらデートなんだけど。

「ところでミュウちゃん、駅でついついひっぱっちゃったけど、よくよく考えたら追われてるのは俺だけなんだよな。ミュウちゃんも一緒にいることでもしかしたら危険な目に遭うかも知れない。さっきのタコヤキにもばれた時には襲われてたかも知れない。成り行きでここまで付き合い合わせちゃったけど、車も手に入ったし、俺もなんとか逃げ切れる算段もついたし。ミュウちゃんは家まで送ろうか？」

俺と一緒にいることで、ミュウちゃんにまで危害が加えられるのは本意ではない。もともと無関係なんだ。ましてや恋人同士でもない、ただの幼馴染。さらにいうと、一方的に俺が好きなだけ。一緒にはいたい。けど、好きな女の子を危険な目にさらしたくない。

「断る」

きっぱりとミュウちゃんは云った。

「へ？」

思いがけない返答に声が裏返り、素っ頓狂なりアクションになってしまった。

「もしかして、俺のことが好きで、危険にさらされている俺がほっとけないから、一緒に逃げてくれるってこと？」

「あ、それ勘違い」

間髪いれずに否定する。このタイミングは本当に天才的だ。

「もう十分あたしも巻き込まれてるわよ。カエルさんたちから逃げてる時に、あたしも目撃されてるだろうし、狙撃されたのなら、そのシューターってのにも見られてるはず。もし危ない人たちなら、事情を知ってる人間全員消そうとするんじゃない。もしあたしが宝くじの事知らないって言っても、ハヤトと一緒に逃げたという事実があれば、十分疑われる。もしかしたら知っているかも知れないという可能性で、消される動機としては十分でしょ。病気になった牛さんとか豚さんとか。本当は病気に罹ってないかも知れないのに、同じ産地ということで殺されちゃうニュースがあったけど、それと同じよ」

なんか殺伐とした例えだな。けど、理にかなっている。

「それにもうこうなったら、ワケマエもらうしかないじゃない。本当に一等が当たってるなら二億。二人で分けたら一億。職を失った翌日にそんなチャンスが巡って来るっていうのは、きつと何かの思し召しなのよ」

助手席をちらりと見た時、瞬間ミュウちゃんの目に円マークが浮かんでいる気がした。……一緒にいられるのは嬉しい。けど、なんかお金が目的ってなると、複雑な気分になってくる。

「何も家じゃなくて、警察に逃げててもいいんじゃないかな。相手は分かりやすい変人スタイルで追ってくれてるから、事情を説明しなくても変質者に追われてるって理由で助けてくれると思うよ。ましてや女の子だしね。お金より、安全の方が大事だよ」

本当にそう思う。俺に何かがあるのは仕方がない。ある程度、諦めはついている。俺はそういう不運に見舞われる星周りなのだ。昔から。けど、好きな女の子が不幸な目に遭うというのは、自分のこと以上に辛い。想像したくない。

「けど、あたしがいなくなったら、ハヤトつかまるよ」

きっぱりと云った。

「なんで？」

「だってバカだから」

なんか悲しくなってきた。

「……ま、本当のことだけど、さすがにもう相手が追跡できない、追いつけない状況なら逃げ切れるっしょ?!」

「そうとも限らないわよ。スコットランドヤードでも相手は数がたくさんいる。自分より機動力は低い。けど、ゲームになるわけじゃない。相手の規模もまだ未知数なのよ。もしかしたら県下全域に仲間がいるかも知れない。そういう人たちが包囲網を敷いてくるとそのうち居場所も特定されて、捕まえられるかも。あと、車で逃げてるのがばれれば相手も車で追ってくるんじゃない? そうすれば機動力でも追いつかれる。バイクが相手になれば、渋滞にハマっているところで捕まるかも知れない」

せっかく命の次に大切な携帯を捨ててまで安心要素を増やしてきたのに、なんかまた不安が増えてきた。

「今までもあたしの手助けがあって、ここまで逃げてこれたでしょ。これから先もあたしがいると助かると思うけどな」

「確かに、ミユウちゃんがいることで随分助かってる。俺にはない知恵も出るし」

なぜか敗北感が一杯だった。この事件が落ち着くまで、ずっと一緒にいられるのはステキだが、素直に喜べない。

「じゃ、あらためてよろしくね」

ミユウちゃんは胸の前で手を合わせ、そわそわしだした。

「ねえねえ、じゃ、そういうことで、そろそろ宝くじ調べましょうよ! 本当に一等が当たってるか」

お金かよ! と思ったが、実はこれはこの逃亡劇のもっとも重要な情報であることは間違いない。もしこれがただの三百円なら、自分からカエルたちを見つけ出し手渡してこの件を終わらせたいくらいだ。

「ああ、確かにそれは大切だ。……ちよっと待って」

俺はポケットからくしゃくしゃになった宝くじと、新聞の切り抜きを取り出した。それをミユウちゃんに渡す。

「じゃ、俺は運転してるから、番号の照会をよろしく頼むぜ」

ミユウちゃんは宝くじと新聞の切り抜きを手のひらで丁寧にのばした。

「よし、確認するか。まずは組番だ。ええと、66組。これが違えば番号合っても意味ないんだよね」

「そうだね。まずは組番があつてなきゃ、番号だけ合つても当たりじゃないよ。物凄い悲しいハズレのパターンだよ」

しばらくミユウちゃんは黙って確認していた。そして、「おお」とか「ふむ」とか「むむむ」と言葉にならないうめき声をあげている。

「一等の66組は合ってる。間違いなく合ってるよ、ハヤト！　すごい。本当に一等かも」

いきなり番号まで見て確認すればいいのに、ミユウちゃんは、ゆっくりじっくり確認し、楽しむタイプらしい。ちらりと見ると、新聞の一等の番号を指で隠している。

「よし、じゃ一つ目の番号を確認しよう。宝くじのは、1。当たりは……おお！　1だ！」

宝くじってたいてい左端の番号は1じゃないだろうか。

「よし、2つ目を確認しよう」

ということで一ケタ確認するごとにミユウちゃんは感嘆の声をもらし、長い時間をかけ、6ケタの数字を確認した。

「……じゃ、次の数字を確認。えいつ！」

と勢いをつけて言った。

「えっ、ええ？　おっ？」

「どうしたの？」

「数字がないよ。これで終わりってこと？」

「だって、宝くじって6ケタじゃなかったっけ。7つ目はないよ」

「おお、本当だ。新聞の当たり番号も、もう数字が出てこない。ってことは、やっぱりこの宝くじ、一等の当たりだよ！　二億円だ！」

当たりか。けどまだ実感が持てない。恐らく自分で見てないからだ。

「もう一度、数字をよく確認して」

「うん、宝くじが192636。当たり番号は192636。……同じだ」

ミユウちゃんの声がちょっと震えていた。俺もどきどきしてきた。

目の前の信号が赤になり、俺もミユウちゃんから宝くじと新聞の切り抜きを受け取って自分でも見てみた。

「……合ってる。一等だ。二億円だ！　おおおおお！」

瞬間魂が抜けそうな感覚をおぼえ、俺は呼吸が苦しくなった。もうこれで俺が、いや俺たちが、命を狙われていることは確実にになった。そして、二億円は今、俺の手に握られている！　一生に一度、あるかないかの大チャンスが俺に今、舞い込んできている。

信号が青になった。俺は宝くじと新聞の切り抜きを、そのままポケットに乱暴に仕舞いこんだ。

「もう後戻りができない状況だな。ミユウちゃん、こうなったら逃げきろう。そして、この二億円を手に入れよう」

ミユウちゃんも声を興奮させて「うん」とうなずいた。

「そして、共に暮らそう！」

「それは無理」

勢いでも本当、連れられないなあミユウちゃんは……。

果たして俺の車は順調に山里公園へと到着した。

ゆったりした駐車場に停め、俺はミユウちゃんからもらったお弁当を持って車を出た。ミユウちゃんはデザートの入ったビニール袋を嬉しそうに持っている。

「へえ、この公園ひろーい！ ピクニックみたい！」

春先、芝桜の季節になるとこのゆったりとした駐車場も車で一杯になる。休日には公園内に的屋も並ぶらしい。もはや祭りだ。

「ミユウちゃんは、あんまりこっちの山里の方って来たこと無かったの？」

「ないよ。考えてみたら高校卒業してあんまし公園って来てなかったな」

「俺は、……ちょっち仕事の休憩なんかで立ち寄るかな」

営業が上手くいかず、心がくじけそうになる時なんか、よくお世話になる。

俺たちは芝生の斜面に腰を下ろし、弁当を食べることにした。

「ミユウちゃんはそれだけでお腹空かないの？」

「大丈夫、ダイエットダイエット」

プリンアラモードを目の前にしてダイエットという単語は不適切ではないだろうか。けど、そなずれっぴりがミユウちゃんの可愛いところだ。俺は弁当を覆っているビニールをはがし、割り箸を取り出し食べる準備を整えた。

「いただきます！」

俺はきちんと手を合わせて目を瞑り、世界の平和を三秒だけ祈ると、弁当のふたをあけた。

一口食べる。うまい！

「ミユウちゃんおいしいよ、ありがとう」

ミユウちゃんは屈託なく笑うと「お礼はあのはげちょびんな上司に言ってね」、と味が不味くなるようなことを言った。

「考えてみれば、上司が買ったのが巡り巡って俺の口に入ってんだよな。……ま、いっか！ 弁当には罪はないし、おいしいのは間違いない！」

俺の体も欲しているのだろう、口内は唾液がジュルジュル分泌される。胃もぐうぐうなって早く入れろと急き立てる。まてまて、落ち着け俺の体よ。急いでも消化が悪いぞよ。食べ物をしっかり消化するには良く噛んで食べないといけないんだぞ。

俺は必至で自分の体をたしなめた。

「おいひー！」

ミユウちゃんは鼻に生クリームをつけて幸福な表情を湛えている。プリンアラモードはもうあらかた食べつくしていた。いつも疑問に思うのだが、女の子はどうして美味しいものをゆっくり味わおうとしないのだろう。おいしいものを三口くらいでぺろりと食べたりする。美味しさをもっと楽しむのなら、もっと時間をかけて五口くらい、じっくり時間をかけながら食べた方が幸福に感じる時間も長くなるんじゃないだろうか。

ま、いいや。

「ねえハヤト。これからどうする？」

「う～ん、そうだなあ。とりあえず二億円をお金に変えないとな。でも俺みずほ銀行に口座無いし、近場の支店だとやつらがはってるかも知れないもんな。いっそ東京の方に出て、そこで口座を作って二億円を振り込んでもらうか」

「ふむふむ。あたしは印鑑持ってないから口座はハヤトにまかせる。ハヤトの口座に入ったら、まず手付に百万円おろして当座の資金にしよう。で、ゆくゆくは一億をゆっくりおろしてあたしの貯金に積んでいく。いい作戦ね」

ミユウちゃんは嬉しそうに計画を練っている。女の子の幸福そうな表情は、本当にいいものだ。こっちも幸福な気分になってくる。

「ところでハヤト、ちゃんとハンコは持ってるの？」

「ふっ、あまいぜミユウちゃん。営業マンたるもの常に自分のハンコをポッケに仕舞ってるものなんだよ」

そう言って俺はハンコを取り出した。

それを見てミユウちゃんは「バカ！」と一喝した。そして目が飛び出さんばかりにカッと見開き俺に突っ込みを入れた。

「それ、シャチハタじゃん！」

えええええ！　　そういやそうだ！　俺もびっくり。

「仕事で使うのってそういやシャチハタだった。はあ、三文判は家だ。取りに帰るわけにもいかないし、ハンコ屋さんで作んなきゃ」

ちょっぴりしょんぼりした俺に、ミユウちゃんは珍しく優しい声をかけてくれた。

「けど、これで何が必要かもまたわかったわね。こういう話をするのも大切ね」

「うん、本当だね。俺もそう思う」

幸福な時間が流れていた。こんな幸福な時間って、いつぶりだろう。もしかしたら、はじめてかも知れない。

俺は父親から昔聞かされた話を思い出していた。

「ねえミユウちゃん。話は変わるんだけどさ。プレミアムミニッツって知ってる？」

ミユウちゃんは不思議そうな顔をした。

「ぷれみあむみにっつ？　聞いたことないなあ」

「プレミアムミニッツ、多分俺のおやじが気まぐれで言った造語だと思うんだけどね。　“極上のひと時”ってことみたい。人間はそれぞれ、人生の中でもっとも幸福に感じられるひと時、その為に生きているんだって。特に男はロマンを持って、大きな目標に向かって行動しないとイケない。目標を成し遂げた時、幸福に見舞われた極上の時間を過ごすことができる。それは決して長い時間じゃないんだけど、確かに自分の生きてきた意味を実感できる、そんな時間になるんだって。それをおやじはプレミアムミニッツって呼んでたんだ」

「へえ、ロマンかあ。なんかいいね」

「俺、おやじに聞いたんだ。お父さんはもうそのプレミアムミニッツって体験したのかって。そしたらまだだっというんだ。この話をしたのが、俺が小学三年生の頃だったかな。おやじはおやじでまだ自分のロマンを追ってたみたい。で、中学の時に俺とおふくろを捨てて家を飛び出したんだよ。……サイテーなおやじだったな」

ミユウちゃんも中学生のころの俺を思い出したのだろう。しきりにうなずきながら聞いていた。

「ほんとう、父親が出てった頃のハヤトって、可哀想だったよね。いつもハヤトをいじめてた子ですら、引いてたもんね」

なんか嫌なことまで思い出させるなあ。せつかくいい話してるつもりだったのに。

「ま、そんなサイテーなおやじはもうどうでもいいんだ。俺は俺でもう仕事にもついて、自活してる。二億円手に入れば取りあえず今後お金で苦労することもなくなるだろうし。俺は幸福に向かってるんだと思う。もしかしたら、今がプレミアムミニッツなのかなあ、なんてふと思ったりしたんだ」

「けど、まだ確実に手に入れたわけじゃないよ。手に入れた後も追われれば安心の生活とはいえないし」

「そうだね。とりあえず今の目標は、このトラブルを乗り越えて、完全な安全を手に入れることかな。その時にプレミアムミニッツが訪れるのかも知れないね」

弁当を食べきると、なんだか眠くなってきた。太陽もぼかぼか陽気。ミユウちゃんも隣で欠伸をしている。

「なんか、眠くなってきたね」

「うん」

うなずくミユウちゃん。今なら告白するとすんなりOKするんじゃないか……なんて思っていたら、変な物が視界に映った。

公園の入り口、自転車に乗った妙な二人がへろへろになって走っている。

数秒間、俺の脳は思考を停止していた。理解ができなかった。あれはカエルとハチマキだ。なんで、あの二人がここにいる？！

「ミミミミミ、ミユウちゃん、やばい！ 逃げよう」

背筋が凍りつくような悪寒が走り、言葉は極度にどもった。ミユウちゃんはまだ気付いていないのだろう、「ふえ？」と気の抜けたリアクションをとった。

「カエルとハチマキが、こっち向かってやって来てる！」

こうして俺たちの短い休息は終わりを告げたのだった。

俺は食べ終わった弁当をビニール袋に入れ、口を手早く仕舞った。

「ハヤト、これも入れてよ」

ミユウちゃんがのんびりと食べ終わったデザートのを俺に向けた。

「あああああ！」

俺は急いで再び口を開け、デザートのを入れると、口を閉めずに「車までダッシュだ！」と声を張らせて言った。

車まで少し距離がある。なんのなんのいってもカエルとハチマキは自転車だ。かなり近くまで迫ってきていた。

「ミユウちゃん、追いつかれるかも。もし追いつかれたら、俺が戦うから、ミユウちゃんは先に

逃げるんだ！」

ハチマキが先に迫って来た。

「みつけたぞお、逃げるなあ」

口からよだれが垂れそうなくらいだらしない口元をしている。相当な疲労がたまってるんだろうな。

思えば俺たちは、駅からは電車と車で移動している。その間、カエルとハチマキはひたすら自転車で追ってきているはず。自転車を手に入れる前でも、すでに俺に振りきられるほど体力を消耗していたのだ。

てことは、今の元気はカラ元気か！

俺は俄然勇気が湧いてきた。

「ミユウちゃん、俺、ハチマキやつつけてくるわ」

俺は逃げるのをやめてくるりと回れ右をした。迫るハチマキを待ちうける。自転車で向かってくる歩道の脇は緩い芝生の斜面になっていた。

ハチマキのサングラスがきらりと光った。

「てい！」

俺は近づいたハチマキの自転車の前輪を蹴った。

「どわあ！」

バランスを崩したハチマキはそのまま芝生の斜面を面白いくらい転がり落ちていった。まるで漫画だ。

「わあ、面白い！」

ミユウちゃんが目をきらきらさせて俺に寄ってきた。おいおい、逃げてくれよ！

「今度、あたしもやる！」

「いや、やめて。俺がやるから、危ないから」

ミユウちゃんは頬を膨らませて「けち！」といった。

「じぐじょう（ちくじょう）！」

低い声でカエルが迫って来た。ミユウちゃんは俺の制止をきかずカエルに自ら向かっていき、結局俺の時のように、自転車の前輪を蹴った。

「あれえ～」

カエルも面白いように転がっていった。先におちたハチマキは、もう追う気力がなくなったのか、大の字になって伸びている。ハチマキはともかく、カエルは折角のスーツが台無しになってしまったろう。

「きっと追い付けばなんとかなると思ってたんだろうね。けど、あんなにへろへろじゃ、中学生でも捕まえないよな」

ミユウちゃんはそれを聞いて大笑いした。……と、思ったら急にシビアな顔になってこう言



った。

「いえ、良く考えたら大問題だわ。ハヤトの携帯を折角捨てたのに、それとは別の方法でカエルさんたちはあたしたちを追ってたってことよね。その方法がわからないと、結局逃げきったことにはならないわ」

確かに。それは大問題だ。しかもかなりショックな事実だ。じゃ、なんのために俺は携帯を捨てたのだ。呆然としている俺に、ミユウちゃんは、ぴしりと言った。

「じゃ、とりあえず車に戻って、逃げましょ。少なくともこちらも動きながらの方が、向こうも捕まえにくいはずよ」

俺はうなずき、共に車に向かった。

車のエンジンをかけ、出発する。カエルたちが追ってくる様子はない。

「しかしさ、じゃあ今度はどこに向かえばいいんだ！　なんで俺の場所がわかんだよ！　わけわかんないよ！」

本当は胸の内は不安でいっぱいだ。けれどもそれを上回る怒りの感情が俺の脳を席卷していた。これも人間の防衛本能なのかも知れない。

「落ち着こうよ、とりあえず。まずはどこに向かうかを定めよう。遠くに逃げるのか、はたまた携帯を取りに行った方がいいのか、家に帰るのか。警察に行くのか」

俺の希望としては、危険を冒してでも携帯電話を取りに行きたいところだ。

「はあ、携帯電話がいいなあ」

そこでミユウちゃんが手をポンと叩いた。「携帯、連絡、パンダマン！」

なんでここでカタコトなの？　それはいいとして。

「ああ、今までどうすればいいのか示唆してくれてたのがパンダマンだったね。いまごろ携帯にはパンダマンからの連絡が何度も入ってるんだろうなあ」

「そう、そのパンダマンよ！　パンダマンが次にどこに行くか、言ってたじゃない！」

そういえば言っていた。すっかり忘れてた。

「長命寺だ！」

パンダマンは言っていた。長命寺に向かい、弁慶に会えと。どうやら弁慶は俺たちを守ってくれるらしい。

ミユウちゃんは早速スマートフォンで石蔵町の長命寺の場所を調べてくれた。電話番号が分かりそれをナビに入力する。これで行先は定まった。

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

---

いや、長編小説ってやっぱ長いですね。

この分だと最終回は第16集くらいになりそうです。う～ん、長い。

リアルタイムで書いている本編は、ようやく最終章に突入しました。

最終章をすすめながら、今の場面を読み返すと、

ほんと、バカみたいにバラエティに富んだ話だな！

と感心します。みなさまもぜひ今後の展開を予測して見て下さい。

完全に裏切りますから（笑）。

今回は心強い仲間、弁慶が登場します。

そしてカエルたちとの再戦。謎はさらに深まり、物語は厚みを増します。意外とね。

書き上がったなら文学賞へ応募予定ですのでどこまで公開できるか分かりませんが、

ひとりでも多くの人を笑わせたいなあと思ってます。